大学の世界展開力強化事業　第2回外部評価委員会

議事録（質疑応答）

（夛田；司会）　第2回外部評価委員会の開催

（大嶺コース長）　第2回外部評価委員会の開催挨拶

（夛田）　当該事業に関する概要説明、第1回外部評価委員会での指摘事項の再確認、平成30 年度下半期から令和 2 年度までの事業実施状況などについて説明

（宮川委員長）　開会に際してのご挨拶（省略）。質問やコメントをお願いしたい。

（中川委員）　①コロナ禍の中でこういった事業を執行されるのは大変であり、先ずは担当されている先生方のご尽力に対して敬意を表したいと思います。目標はグローバル人材を育成するということですが、もちろんそういった人材が育つような「教育の質」を保証しなければならないのはわかるんです。しかしながら、それが必要十分ではないだろうと思います。必要条件であっても、十分ではない。このような観点から、目標とされているグローバル人材がこの短期間で育っているのか、あるいは既に育ったのかをシッカリと見ないといけないと思います。というところで、実際、学生はどこに就職したのか、修士課程を修了後にどういうふうな仕事をされてるのかという所までに踏み込んで調査しておくことも大事かなと思います。

②夛田先生が説明されたように、既に報告書ができあがっているのであれば、本日、我々が開催している第 2 回外部評価委員会の評価結果はどこかに反映されるのかについて、お聞きしたいんですけどね。

（夛田）　まず1点目につきましては、長崎大学から派遣した単位互換制度に基づく短期留学（6 か月間）の学生達、あるいは山東大学と成均館大学校から受入れた学生達を対象にアンケートを取っております。事後調査ですが、満足しているとの回答をいただいています。特に、日本人の学生達については、このプログラム下で交流したことによって、自分自身の英語力が充分ではなく、授業や日常会話等についていけていないこと、山東大学と成均館大学校で勉強中の他国からの留学生を含めた交流の中で、非常にグローバル人材として遅れていることを認識して帰ってきています。全員ではありませんが、上述したような刺激を受け、自ら英会話の勉強をする学生

もいました。 就職に関しては、先ず長崎大学から山東大学へ派遣した二人の DD 学生について紹介します。社会環境デザイン工学コースから派遣した一人は熊谷組でしょうか、大手の総合建設会社に入社致しました。一方、国際水環境工学コースから派遣したもう一人の学生は、膜分離技術を用いた研究を行っていましたが、関西の化学系の会社に就職しています。また、単位互換制度に基づく短期留学（6か月間）で山東大学に1名、成均館大学校に1名を社会環境デザイン工学コースから派遣した学生達は、当初、就職活動のことをかなり気にしていました。6 カ月間の短期留学から帰ってきてから、短期間に経験したことを上手く就職試験（面接）でアピールして、二人とも第一志望に（大成建設㈱、㈱オリエンタルコンサルタンツ）就職できました。二人ともに海外関係の仕事に従事したいという希望も持っているようです。全員の就職状況を説明できていませんが、代表的な事例は以上のようなところです。正直に申し上げて、本交流に長崎大学から参加した全員が事例のようになったかということではありません。この交流プログラムを利用した後に、大いに感化されてもっと前向きに目指していかないといけないと思っているのは、3割～4割の学生と思われます。半分近くの学生は、そのままで帰って来てきています。なので、今後、どの様にしてグローバル人材育成を拡げていくのかは、残された課題かと思います。

２点目については、誠に申し訳ございません。今回、外部評価して頂く結果については、別途、取り纏めさせて頂き、専用 HP に掲載して公表させていただく予定です。なぜ、先に報告書を作成せざるを得なかったかと言えば、今年度が本事業の最終年度に当たり、予算執行の関係上で日程的な縛りがあったためです。とりあえず、我々としては5年間やってきたことを先行して取り纏めさせていただきました。その上で、今回の第2回外部評価委員会でご指摘いただいた事項を別途議事録として取りまとめて、専用 HP などで公開させていただきます。後半の説明内容においては、第3モードへの新たな展開への説明がございます。すなわち、この5年間で培ったものを次の展開として応募申請しようという動きがありますので、その申請書にも今回の指摘事項を活用させていただくことにしております。ご指摘のとおりで誠に申し訳ございませんでしたが、予算執行上の制約があったものとご理解頂ければ有り難い限りです。

（中川委員） ぜひ次のモードにご活用いただければと思います。さらに、日本人だけでなく、山東大学および成均館大学校からの学生についても同様に調べて頂いて、グローバル人材を目指した交流プログラムに参加した学生達が、普通の学生生活を送っている学生達よりもかなり意識も高いし、就職も希望通りに決定し易

い等、長崎大学だけに限らず、他の2大学についても調べて頂ければと思います。

（夛田）長崎大学の事例を中心にご説明致しましたが、山東大学から長崎大学へ留学したDD 学生がさらに、2021 年 4 月から九州大学の博士コースに進学する事例もあります。それらを別途整理させていただき、情報としてご提供させていただきます。

（新井委員） 二点ほど質問させて頂きます。

① DD制度については、長崎大学から参加した学生が少なったということ。一方、山東大学の学生がかなり多かったことに関連して、日本の企業では、DD 制度で修士号を二つ持っていることに対して、就職の際にプラスになっていますか？さらに、DD という資格に対する意識の違いが中国と日本との間に存在しますか？

② 大学間での共同研究ということについては、今回のご説明の中では具体的に紹介がありませんでしたので、今後、何か考えておられるのか教えて下さい。

（夛田） ①私の知っている限りでは、日本の企業が二つの修士号を持っているからと言ってそのような学生を高く評価しているかというのは在りません。一方で、中国の学生がなぜ多いのかという質問に関しては以下の通りです。すなわち、山東大学については、山東大学の副学長がトンネル工学の専門家で、TBM を中心とした中国の現場でデータを取得するなど、さまざまことをやっています。長崎大学のトンネル工学を専門にされている蒋 宇静 先生とは既に共同研究を行っています。先程、三大学の共通科目「International Infrastructure and maintenance」 の紹介を致しましたが、この講義を最初に担当して頂いた山東大学の楊先生（2019 年 1 月 16 日に来崎しての講義）は、長崎大学の蒋教授の所で博士号を取得し、修了して山東大学で講師をされています。共同研究も蒋先生グループと既に始まってるということで、山東大学の土建与水利学院に所属する修士号を取得しようとしてる学生さん達が蒋先生の研究室で修士学生となって、様々なトンネル工学に関する研究について指導していくという流れがあるものと理解しています。さらに、サマープログラムに関しては、山東大学の学生数が大変多いということや奨学金などの経済的な支援があることも一因ではないかと思っています。長崎大学としては非常に羨ましい限りです。

②重複になりますが、今、山東大学と長崎大学では共同研究等も始まっています。一方、長崎大学と成均館大学校に関しては、特に研究テーマが決まっている訳ではあ

りません。しかしながら、水資源専門大学院の先生方の研究内容を調査しながら、何か上手く共同研究が出来ないかと模索しています。特に、東京大学で博士号を取得された金教授は、韓国における膜分離技術の大家であり、長崎大学の国際水環境工学コースの藤岡貴浩准教授と上手くタイアップして何か出来ないだろうかということを模索中です。現段階では、共同研究による連携がはっきりと見えないものの、教員間の交流に関しては、様々な形での可能性は在るのではないかと思っているところです。

（新井委員） 共同研究は会社の中でも同じような状況です。すなわち、他社といろいろな共同研究を行う中で、コロナ禍の影響もあり、バーチャルな研究体制も考えています。実際に対面で研究するだけではなく、「オンライン化」に依存する取り組みも一般化されています。そういったものを使いながら、今後研究していくことも多分できるようになるものと思われます。夛田先生のお話から、人の繋がりがあれば「バーチャルな研究体制」もできるんじゃないかと感じました。

（宮川委員長） コメントを二つさせて頂きます。

①中川先生および新井様からもご指摘の様に、DD 制度に基づく日本人学生の派遣が少ないのが気になっています。「学生目線に立った DD プログラムを構築する」との夛田先生からのご説明がなされたましたが、その説明の中で非常にタイトなスケジュールでありますとの表現がなされ、まだまだ十分に学生の目線に立っていない気が致します。その中の一つとして、先生間の交流、先生の目線があれば、学生も交流し易くなると思われます。要するに、学生目線に基づけば、先生の態度や先生の交流実績、先生方の目線というのは、学生の目線に寄り添う形になるものと私は思うので、ぜひ先生間の交流（共同研究等）を積極的にお願いしたいと思います。

②総括評価で、「安定的な財源」という文言がありましたが、当該事業終了後の展開として、次の資料でご説明がなされるのでしょうか？

（夛田） 第三モードの公募事業についての説明

（夛田） 委員長からご指摘が在りましたように「お金をどのように担保していくのか」については、本来ならば、工学研究科が自前で予算化してサポートして頂くのが一番良い方策ではあります。しかしながら、予算が厳しい状況下では、第3モードの公募を活用して申請することで対応していく所存です。

（清水委員） 先ず初めに、このプログラムを計画・実施された教職員の皆様のご苦労とご努力に敬意を表します。大変だったと思います。交流プログラムを実施するだけでなく、評価や中間報告の類の膨大な仕事量ではなかったかと想像致します。ほんとうにご苦労様でした。私が見た所の成果としては、大学にとっては制度を作ることが一番大きな成果です。とりわけ、博士コースが DD プログラムとして新しく展開できるようになられたことは、大変素晴らしい成果と高く評価されます。もう一方では、学生にこういう交流プログラムを介して経験を持つ機会を増やすことが重要なことです。交流に参加する日本人学生数が不足するとのご意見もありましたが、まずは学生にこういう経験を持たせることが大事なことだと思います。学生全員が計画どおりの実施とはなかなか難しいのですが、日本人を派遣し、留学生を受け入れて交流するという意味ではとても素晴らしい実績だと思います。第三モードを展開していく上では、資金面のご苦労もあるということですから、先方の大学の方が奨学金を持って来られるのであれば、その受入れ体制が出来上がっているのであれば、お互いの状況に合わせて進めていかれるのが良いと思われます。最後に私から一つ質問が在ります。長崎大学としては DD 学生を定員化されるのですかね？マスターもドクターも正式な意味での定員化を設定されるのであれば、予算のつき方も変わってくるのではないかと思われますが、如何でしょうか？

（夛田） 国立大学では、第 4 期の中期目標・中期計画が 2022 年度から始まりますが、現在、中期計画を作っている最中です。ジョイントディグリーとかダブルディグリーについては、何らかの中期計画の中に盛り込んだ方がいいのではないかという意見が国際担当の理事から提案されております。一方で、定員化すれば支援する資金面の話があるので、少し微妙な検討に入っているところです。現在、7つの研究科の中で3つの研究科（工学研究科、経済学研究科、水産・環境総合科学研究科）が DD 制度を実施していますが、相互交流が確りとできているのか、実態調査を行っている所です。少なくとも、正規学生である DD 学生は、協定校の学生であれば「入学料および授業料の免除」や「希望者に対する宿舎の優先的な紹介」などの優遇措置を取っています。これらは、学則の下で DD 制度に関する実施規定で謳っているところです。なお、正式な定員化までは踏み込めていないのが現状であり、今後は目指していくことをご理解いただければと思います。

（清水委員）定員化を目指されているということですね！

（宮川委員長）本来であれば、午後 5 時までに終了予定です。少し時間オーバーしていますが、もう少し議論させて頂きます。

（中川委員） 第三モードへ展開していくとのお話がありましたが、今後、予算がなくなることへのご覚悟はどの程度にお考えでしょうか？言い換えれば、第3モードに採択されなかった場合でも 5 年間から 6 年間は自力で継続されるのか、ご覚悟は如何でしょうか？そのあたりをもう一度確認させて頂きたいと思っています。定員措置も、予算措置も行って臨む覚悟ですか？

（夛田） 私の願うところとしては、万が一第三モードが採択されない場合でも、できる範囲の中で蒋先生や鈴木先生達が頑張るだろうというふうに推察しています。大学として何等かのサポートをしてもらえるか否かについては、国際担当の理事に対して 3 月 31 日までは何らかの努力を行っていく所存ですし、私としては採択がされることを希望致します。第 1 回の外部評価委員会の時にもご指摘がありましたし、さらに文部科学省からの中間評価「B 評価」（2018 年 12 月発表）を含めた中にも指摘がありました。すなわち、第3モードに申請するのであれば、相互交流が極めて重要なため、日本人学生に対して如何に魅力的な交流プログラムであるかを感じてもらう努力が必要不可欠です。我々も一生懸命説明会を開催してきましたが、日本人学生からの反応はなかなか響かずに難しいと思っています。したがって、第三モードの申請書を作成する際には、第二モードで上手くできなかったことをどういう対応策で上手く日本人学生を集めて派遣することが可能になるのか、一つの大きな課題になるのかと思っています。

バトンタッチしていく上では、バトンを確りと受け取って頂き、第3モードによる交流プログラムを展開して頂ければと思っています。お金がないと出来ないこともありますし、できる範囲の中で細々ながらも継続して実施していくことが大事と思っています。

（中川委員） 相手の大学もあってのことなので、いい関係をできるだけ継続していただけるように、残った先生方に頑張ってほしいと思います。エールをお送り致します！

（蒋）宮川先生、オブザーバーで参加しています蒋（ジャン）と申します。発言させて頂いても宜しいでしょうか？

（宮川委員長） どうぞお願い致します。

（蒋） 世界展開力強化事業はもう 5 年以上、夛田先生を中心に長崎大学の関係者、スタッフ一同が一丸となって頑張って来ました。特に、2018 年 7 月には、第1回外部評価委員会の席で先生方から貴重なご意見およびアドバイスを頂戴致しました。我々にとっては、大きな自信にも繋がりました。また、第三モードについては、かなり公募申請の競争が激しくなるものと予測しています。折角、日中韓の水環境技術者育成事業を含めれば、ここまでトータルで 10 年間をずっと中国＆韓国の大学との交流プログラムを展

開して来ました。今まで積み重ねてきた経験、そして大学間の繋がりや国際的なネットワーク等を今後とも上手く活かしていきたいと思っています。夛田先生は、4 月以降、別の立場で長崎大学に残られますので、我々を見守っていただき、ご協力をお願い致したいと思っています。事業に関する様々な反省点や問題点等については、継続的な改善を図っていきたいと思っています。また、双方向の交流については、受入れについては中国から多くの留学生が来てくれていますが、日本人学生の派遣が少なく、事業自体はあまり完全とは言えない状況です。いかに日本人の学生にとって魅力のある事業、あるいは魅力のある交流プログラムの内容にするかが今後とも課題になってくるものと思いますので、しっかり頑張っていきたいと思っている次第です。本日ご参加されている先生方におかれましては、世界展開力強化事業の外部評価委員会の解散と共に退任していただくことになります。一方、第 3 モードの申請書が採択された場合には、引き継ぎ先生方には外部評価委員をお引き受け頂き、ご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。4 月から私や鈴木先生など、若い先生を中心に頑張って参りますので、今後ともご指導の程、宜しくお願い致します。

（宮川委員長） 蒋先生からの決意表明が聞けて嬉しかったです。

（夛田） 宮川委員長、私から一言発言させて頂いても宜しいでしょうか？

（宮川委員長） どうぞお願い致します。

（夛田）蒋先生からのご発言をいただき、誠に有り難い限りです。

さて、蒋先生は、昨年度および今年度、工学研究科の副研究科長として、研究と国際をご担当され、非常に頼りがいのある先生でいらっしゃいます。また、4 月からも2年間副研究科長を継続されるとお聞きしています。工学研究科として DD 学生への経済的支援を新設していただければ、誠に有り難い限りです。さらに、第 3 モードに採択されるようであれば、是非とも本日ご参加の先生方には、新たな外部評価委員会にご尽力いただければというご希望も蒋先生から表明されましたので、今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（宮川委員長）

私から最後に少しコメントをさせて頂ければと思います。本来は大学全体がサポートすべきプロジェクトであり、DD 制度では数が少ないものの着実な実績を上げつつあるものです。しかも、これからも多くなる可能性が充分にあるものと推測されます。大学全体がなぜ支援しないのかは非常に不思議に思っています。また、大学の組織そのものだけではなく、同窓会とか、あるいは地域のサポーターとか等を含めた形で支援していただければ、非

常に良い形になるものと思われます。DD 制度は大きな実績ですから、まずは先生間の交流を行うことが大事です。例えば、蒋先生が既に交流（共同研究）をしておられます。同様に、他の先生方もどんどん交流していただいて、その結果として、DD 学生を増やしていくのが、私は良い流れになるのではないかと思っています。

このようなプロジェクトは、大学人にとって本筋ではない所での努力とみなされがちではあります。しかし、そのような+αの所、研究と教育以外の所がいまはきわめて重要です。研究および教育の小さなところで努力すれば良いという話はありますが、今の大学にとってはそれだけでは不十分だと思っています。今、長崎大学が実行しておられるような+αな形で努力されるのを私は敬服し、高く評価したいと思っています。

大学は単に「象牙の塔」として、大学の中に籠って教育・研究を行っていれば良いのではなく、色んな所と繋がって、実績を挙げていくことが非常に重要な時代になっています。長崎大学工学研究科のこのプロジェクトが今後ますます発展して行くことを期待し、信じているところです。

（夛田） 本日の資料と最終報告書を先生方にお送りさせていただきます。本日のご意見も含めた上で再度コメントやご質問を頂ければ有り難い限りでございます。蒋先生から提案したように、今回の大学の世界展開強化事業に関連して、外部評価委員のご快諾を賜りました宮川先生を初め中川先生、清水先生、新井様、今日はご欠席の春日様に再度心より感謝を申し上げます。これを持ちまして、第2回外部評価委員会をお開きとさせて頂きます。本日のご参加、誠にありがとうございました。